View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE
provided by Nara University Repository

ジェンダー認知の変容とその測定方法の検討

湯　川　隆　子・石　田　勢津子

An Examination into Measurement for Changes of Gender Cognition

Takako YUKAWA and Setsuko ISHIDA

要　旨

本稿では、近年におけるわが国のジェンダー認知の変容について、心理学的にこの認知的変容の事実をより的確に測ること、さらには、変容の事実が確認された場合、その変容を規定する要因や条件を明らかにするためにはどうすべきかを、測定方法の問題を中心に検討した。具体的には、以下の４点について考察した。まず第１に、わが国において近年、「性別役割分業観」や「男らしさ・女らしさ」のステレタイプなどに代表される伝統的な性別意識あるいはジェンダー規範への準拠意識から、これらを否定する平等主義的な態度やジェンダー・フリーな価値観へと人々の認知が変化してきている傾向を最近の心理学的研究知見から示唆した。第２に、こうした変化をより的確に測定するために吟味すべき心理学上の研究方法の問題点を指摘した。第３に、ジェンダー認知の変容を規定する要因や変数としてどのような概念や指標が有効かを、ジェンダー規範や社会制度・システムと、人間の生物学的・生殖的性との関係から考察した。第４点目に、現在、心理学でよく利用されている尺度として「両性性尺度」と「平等主義尺度」を取り上げ、それらの妥当性と有用性を、上記３点の考察を受けて検討した。

Ⅰ．近年における人々のジェンダー認知の変容傾向

近年、特に1980年代以降、わが国の社会状況におけるさまざまな変動や推移は、われわれの生活のありようや種々の価値観・信念を徐々にではあるが確実に変貌させてきた。それに伴い、男女に関わる価値規範や通念においても、伝統的な規範に則った性別意識から性にとらわれない平等主義的な意識へと変化しつつあるといわれる。この意識変化の背景に、1960年代に端を発したウーマン・リブやフェミニズムの影響があったことはいうまでもない。これらの影響は研究レベルにも及び、それまで常套的に用いられていた「性役割」という用語が、新たな「ジェンダー」という概念にとって変わり、現在では社会的にもほぼ定着したことばとなっている。

かつて1970年代に、およそ世界25ヶ国の人々を対象に行われた大規模な調査研究では、性に関する役割規範や秩序・通念におけるステレオタイプが普遍的に存在することが確認されていた（Williams, J.E.& Best, D.L. , 1982）。しかし、近年提示されているいくつかの研究結果は、1970年代当時の普遍的・斉一的な傾向を必ずしも支持しないか、否定する方向にある（McBroom, W.H.,

平成16年９月21日受理　*社会学部人間関係学科

1987； Lewin, M. & Tragos, L.M. , 1987)。わが国においても、伝統的性別分化意識から平等主義へと推移していることを示す研究結果が提出されている（東・鈴木，1991； 鈴木，1997；湯川・廣岡，2003など)。

たとえば、Williamsら（Williams, J.E.& Best, D.L. , 1994）は、約15年前に実施した先の調査結果（1982）について再分析を加え、さらに発展させた調査をいくつか行っている。先に報告したデータについては、性役割ステレオタイプの普遍性は予想されているほど強固なものではなく、文化によるバリエーションが見られるとする結果修正の報告をしている。さらに、14ヶ国の男女大学生に実施した性役割イデオロギーについての調査結果からは、ほとんどの国で女性のほうが男性よりも幾分近代的か、あるいは平等主義的な見方をもっていることが明らかにされている。またLewinら（Lewin, M. & Tragos, L.M. , 1987）は、1956年からおおよそ四半世紀を経た時点（1982年）において、フェミニスト運動が青年（高校生）の性役割態度に影響を与えたか否かを検討した。その結果、顕著な変化は見られなかったが、高校生女子においては1956年に比べて、女性としての自己の性に対する不満が減少しており、女子の自己イメージが良くなっていることがわかった。さらに、McBroom,W.H.（1987）は、1975年から５年後の1980年にかけて、３つのコホートを対象に縦断的な比較研究を実施した。結果は、男女ともに明らかに伝統的な性役割意識の減少を示していたが、女性の変化のほうがより大きいこと、さらに、家庭内の性役割についての女性の態度は、一貫して平等主義的傾向にあることを示すものであった。

わが国についてみると、東ら（東・鈴木，1991）による、わが国の性役割に対する人々の態度変化についての研究展望では、日本人の性役割態度は、1970年以降、特に1978年以後男女ともに平等主義的な方向に変化し、男女の役割の区分が薄れてきていることが明らかであり、とりわけ、高学歴、管理職や専門職の若い女性が平等主義的態度をもつ可能性の高いことが指摘されている。また、1970年代とそれからおよそ20年を経た1990年代の２時点で、大学生男女を対象にしてジェンダー特性語の分類について同一調査をした湯川ら（湯川・廣岡，2003）では以下のような結果が得られている。まず、時点による変化については、1970年代に比べて1990年代では、典型的な性別規範に準拠した分類が有意に減少していた。すなわち、性の次元における伝統的な男性特性の優位性、つまりジェンダー規範が男性中心に構成され、より明瞭であるという傾向が減少するとともに、男とか女という性別を基準にした分類自体が減少しているという結果であった。性にもとづいて分類する場合でも、従来は男性特性とされていたものを女性特性とする反応が優勢になった。また、これについての性差をみると、２時点での変化は男子により顕著で、結果として男女差が縮まった。しかし、伝統的規範意識からの解放という点では、男子ではそれほどではなく、女子により明瞭であった。1970年代からおよそ20年を経た1990年代現在、青年におけるジェンダー認識は変化し、伝統的な性別ステレオタイプを支持する傾向が減少していることは明らかであった。

以上に紹介した諸研究は、近年の女性の権利や人権等の地位向上をめざすウーマン・リブやフェミニズムの目標の１つが、主に女性が男性に近づくことで達成されつつあること、すなわち、人間のもつさまざまな性格特性における男女間での差異が、どちらかといえば女性の性格特性の認知や捉え方が男性に近づくことで解消され、類似性や共通性が増していくという方向で実現さ

れつつあることを示唆するものであった。

Ⅱ．ジェンダー認知の測定における心理学上の問題

Ⅰで紹介した近年におけるジェンダー規範の減衰や男女平等意識の高揚という傾向は、総理府をはじめとしたさまざまな官民の意識調査や社会統計にも反映されている（井上・江原，1991；1999）。これらの資料から認知的変化の様相を読み取ることはできる。しかし、ジェンダーに対する人々の認知的な変化を説明し、それを規定する条件や要因をそれらの資料から引き出す（特定する）ことは容易ではない。何が原因で人々の意識が変わったのか。心理学的な諸研究をはじめ、ジェンダーに関心をもつ研究者は、その説明を求めて現在までさまざまな試行錯誤を重ねてきている。

ジェンダー認知の変容について心理学が明らかにしようとしている目的は少なくとも２つある。１つ目の目的は、認知が変化したという事実をより的確に測ることである。もう１つの目的は、変化の事実が得られた場合、その変化を規定する要因や条件を明らかにすることである。何を変化の要因、変数として設定するかは研究者の発想と洞察にかかっている。ジェンダー研究に携わる者は、この２つの目的を達成すべく、種々の概念や仮説、メジャーや指標を工夫し、心理尺度や測定具の開発を試みている。

（1）ジェンダーに対する認知的変容の事実をより的確に測ること

第１の目的である、ジェンダーに関する人々の認知的な変化をより的確に測るためには、誰を対象に、いつ、どのような尺度を使って指標化するかを明確にしなくてはならない。基本的な問題として量的指標をとるのか、質的指標をとるのかをまず決める必要があるが、いずれにしても変化を見るのであるから、第１に、時間間隔をどう設定するか、どの時点（年代）からのどの時点（年代）までを変化の時間スパンとするかを設定する必要がある。次に、調査対象をどうするか。人種、民族、年齢、性別、世代、職業、教育年数や社会・経済的階層、居住地域、生活環境などを決めねばならない。さらに、メジャーや指標を定め、尺度や測定具を選ぶことになる。このとき、変化を把握するためには原理的には同一尺度を用いる必要がある。尺度が異なれば測っている内容が異なる可能性があるからである。ただし、この同一尺度を用いる方法には限界がある。それは、先の測定時点で有効であった尺度、より厳密には尺度を構成していた質問項目群をそのまま次の時点で使うことによって、現在ではその項目がもはや有効ではないことは示せても、以前には見られなかった新しく変化した内容を把握することができないという点である。これを克服するような測定方法、すなわち、時代や文化の影響からフリーな測定法が案出されなくてはならない。

ちなみに、先に紹介した諸研究を見ると、まず時間間隔については約25年と最も長いLewinらのものから、最も短い５年のMcBroomまで20年くらいの開きがある。３時点をスパンとしてとっているものはない。調査対象者の人種については、ヨーロッパ、南北アメリカ、アフリカ、アジア、オーストラリアなどほぼ世界の主要な地域を視野に入れているのはWilliamsらだけであり、

LewinらとMcBroomは北アメリカ、湯川らは日本と自国民のみを対象としている。対象者の年齢、階層などは、いずれの研究でも高校生、大学生がほとんどであり、大学生を含めて３つの成人コホート（20代、30代、40代）をとっているのはMcBroomのみである。社会階層もほぼ中流が占めている。さらに、尺度についてみると、Williamsらと湯川らは男らしさ・女らしさをあらわす性役割特性語についての評定あるいは分類課題を、Lewinらは興味、パーソナリティに対する評定および、男(女)であることについての想定的な満足度と性役割態度への自身の意見を、McBroomは「夫(妻)は何々すべきである」いった性役割志向に対する意見への評定を、それぞれ指標として用いている。

これらの測定方法を概観すると、ジェンダーに対する認知の変化を見るという作業は、ここ20年程度を目安として、世界の主要国の主に中流の大学生や若い成人を対象に、従来の性役割規範や特性語に対する認知を２時点で調べ、比較するという方法をとっているということができるだろう。中には教育年数、結婚年数、職業キャリア、結婚や家族観の変化、職業やキャリア観の変化などを媒介変数において分析しているものも見られた（McBroom, 1987)。以上に概観したような測定の仕方が適切かどうかについては項を改めて考察する。

（2）ジェンダー認知の変容を規定する要因・条件を明らかにすること

ジェンダー規範に対する認知やジェンダー観が変化したという事実が得られたときには、その変化を規定する原因や条件を明らかにすることが心理学研究の第２の目的である。変化の要因、変数として何を設定するかをめぐって研究者は旧来の理論や知見を再吟味するとともに、種々の概念や仮説の立案を試み、それに基づいて独自の心理尺度や測定具の開発を続けてきている。

女性学をはじめとして、心理学、社会学、文化人類学など、ジェンダーにかかわる諸科学において得られているこれまでの知見や言説から、ジェンダーに対する認知に変化を及ぼしている要因としてまず考えられるのが、近年の社会変動、つまり、社会・文化・生活環境の変化であろう。高度経済成長とその減衰、情報化社会や消費社会の膨張、少子・高齢化、女性の就労化、晩婚化・高学歴化をはじめ、家族や職場、さらには学校などでの人間関係の変貌など、わが国に顕著な近年の社会・経済・生活環境の変化をあげる研究者、識者は多い。ウーマン・リブやフェミニズムの社会的運動も有力な意識変化の要因の一つに挙げることができるだろう。これらの諸要因が認知変容にマクロに影響しているという見解は、種々の論評や啓蒙書、教科書などで主張されているところでもある。

では、そうした社会・文化的変化が人々のジェンダー観や認知にどのように作用したのか。これらの要因がなぜ個々人の認知的枠組を変化させたのか、個人の中でどのような認知的変容が起こったのかを説明することが心理学の課題となる。先述の諸研究のうちでは、わずかにMcBroomのものがそうした試みを意図していると推察できるのみである。この問題については次節のIIIで詳述したい。

III．ジェンダー認知の変容を規定する要因としての「自己の性同一性・性自認」

ジェンダーについての社会規範と個人の認知との関係を問うとき、現在最も根底的と考えられる要因の１つに「自己の性同一性・性自認」をあげることができるのではないか。「自己の性同一性・性自認」とは、個々人が自己の性（性別）を自身でどう捉えているかという認識であり、自己のジェンダー観を形成する上での基底的要因と考えられているものである。具体的にいえば、自己の性（性別）を肯定的に認知しているか、否定的に捉えているか、自己の性（性別）を宿命的なものと捉えているか、変更可能なものと捉えているか、さらには、性（性別）というものが社会的にどのような意味を持ち、どう扱われているかについて自分はどう判断しているか、性（性別）は自分の人生の中でどのような位置と重みを持っているか、自分の中での他の諸特性や諸能力とどのように関係づけているか、など、自己の性（性別）にかかわる基本的な認知的枠組をさすものである。

歴史的に見て、人間の性（あるいは性別）にかかわる学問上の理論や言説は、これまで『男・女という人間の性（性別）は生得的な生物学上の宿命であり、生まれたときから付与されている絶対的な普遍の特性である』として位置づけられてきた。この性的二型という特性は疑う余地のない自然の摂理・自明の理であった。およそ人間についてのさまざまな考察は、この性的二元論を前提に理論展開がなされてきたといっても過言ではない。心理学も例外ではなく、フロイト（Freud, J.）をはじめとして、これまでの多くの発達理論においては、人間は所与の性（性別）を前提に、社会から要請されるさまざまな性にかかわる発達上の諸目標や課題を達成することが人生を成功裏に導く重要な鍵であると唱えられてきた。ジェンダーの発達を扱った古典的な理論や研究書においては、ジェンダーに関する発達課題がとりわけ重要とされ、その課題を達成することが望ましい人生を築く基礎であること、そして、さまざまな発達は、これを土台にして展開されることなどが綿々と論じられてきた。したがって、自己の性（性別）を肯定的に捉えられなかったり、それに疑問を抱いたり、受け入れられないことは自己否定であり、人間の存在そのものに対する冒涜でさえあった。この結果、自己の性を無条件に肯定できずにいる人たちは、人生の表舞台から遠ざけられ、発達的に不適応を持つ異常者であり、精神障害者とみなされたのである。

翻って、1960年代～70年代にかけて起こってきたウーマン・リブやフェミニズムの運動や研究の影響は、社会的な制度やシステム、あるいは規範やステレオタイプに内包されている種々の性差別を掘り起こし、それらを批判することから始まり、その点検・再考の作業はほとんど全ての学問領域にわたった。その成果は現在上梓されている多くのジェンダー関係の研究書や文献に著されているが、それらの蓄積をもとに、フェミニズム研究は、次第にジェンダー規範や社会システムの基盤や根拠となってきた生物学的・生殖的性（性別）そのものに対する考察へとその視点を深化させていった（小倉，2001など）。

こうしたフェミニズムの学問的動向の下で展開された、心理学でのさまざまな点検や再検討作業において、まず第１に発見された事実は、女子、特に青年女子の中にジェンダー規範やステレオタイプに対する否定的な認知が強く存在することであった（柏木，1967；1972；伊藤，1978な

ど)。同時に見逃せなかったのが、自己の性（性別）に対する否定的な感情がその認知に伴っていることであった。彼女たちは、「男は得、女は損」「女は自由に行動できない、能力を発揮する機会がない」「女は結婚し、子供を育てることだけが幸せとされている」「男は仕事に対する社会的期待や評価が高いが、女には抑制する圧力が働く」といったジェンダー規範やステレオタイプ、あるいは社会制度やシステムに対する否定的な認知を持っていることが多くの研究で指摘された（湯川，1979；1995)。さらにこれらの結果に随伴して、「自分の性を好きになれない」「男になりたい」「今度生まれ変わるときは男に生まれたい」といった自己の生まれつきとされる性（性別）に対する否定的な感情が多く見られたのである（湯川，1979；1983)。この事実を小柳（1981，1982）は、青年における「自己同一性」（Erikson, H.H.）の発達過程を検討する中で、男子青年とは異なった女子青年の特質として発見している。すなわち、女子青年においては、同一性形成のための下位領域として、男子青年には見られない「自己の性の受容と性役割の受容」が大きな要件となっているという事実である。性役割を受容することと自己の性を受容することが認識の上で連動しているというこの事実は、社会的な制度やシステム、あるいは規範やステレオタイプによって定義されているジェンダーと生物学上の性・性別が深く密接に関わっていることを暗示する１つの重大な証拠を提示しているということができるだろう。

その後、ジェンダーに関わる諸科学が発展するにしたがって、現在では、ジェンダーと生物学的な性（性別）が、以前の捉え方とは全く異なる意味で不可分な関係にあることが明らかにされてきている。それは、旧来の発達心理学がその根拠においていた生物学的・生殖上の性や性別は、実はジェンダー規範が拠って立つ根拠ではなく、逆にジェンダーが生物学的な性や性別を規定し、特徴づけているという事実である。この事実は、精神病理学や精神医学、性科学の諸領域では先見的な研究知見として既に報告されてはいた。が、それらは健常者についてではなく、疾病や発達異常の問題をもつ特殊な事例として議論されてきたのであり、発達心理学も含めて、学問的にもまた社会的にも、普通の人々の問題として語られ、認められる知見にまでは流布していなかった（Money, J. & Tucker, P. , 1975)。最近になってやっと世間の注目を集め、人々の身近な問題として取り上げられるようになってきたのである。

現実の例を具体的に挙げるなら、『性同一性障害』や『摂食障害』などは、実はかなり早くから発見されていた現象である（小倉、2001)。これらに共通していることは、自分の生物学的な性を所与のものとして受け入れられず、心理的なダメージを受け、社会生活が送れなくなるほどに苦しみ、傷つき、病的な状態にまで陥っていることである。『摂食障害』は、いわゆる先進国の青年の間で急増しているといわれ、男子よりも女子に特に顕著に見られるものである。「摂食障害」はこれまで、当人の個人的資質、性格、あるいは当人を取り巻く家族関係の問題としてとり扱われ、個人の病理と捉えられてきた。しかし最近では、容貌の美しさやスタイルのよさ、とりわけ痩せていることを賛美するいわゆる伝統的な“女らしさ”と深く関連していることが指摘されている（小倉，2001；牧野，2002；浅野，1996)。“女らしさ”の規範に固執するがゆえに、必要以上に自己の身体的・生殖的性に執着し、病的にまで陥ってしまっている状態なのである。死に至るケースもあるほどである。

『性同一性障害』とは、自己の生物学的な性に特別な欠陥は認められない場合が多いにもかか

わらず、自分の生物学的な性を所与のものとして受け入れられず、自己の性的同一性（性自認）を獲得できないでいる状態である。手術をしてまで生物学的性を変更したいと願うところに、この問題の深刻さが潜んでいる。『同性愛』も初期のころは性同一性障害と同一視され、異性装も含めて、「性的異常者（性倒錯者）」と呼ばれていたが、現在では、これらはそれぞれ別のメカニズムに基づくものとして独立的に扱われている。

ジェンダー規範に起因すると見られるこれら『摂食障害』や『性同一性障害』などにおいては、ジェンダー規範のほうが、宿命とされる生物学的性よりもはるかに優位に作用しているということである。ジェンダー規範に病的なまでに固執し、自己の生物学的、生殖的性に抵抗観を示しているという意味で、まさにジェンダー認知の核心的な問題として捉えることができるだろう（小倉，2001）。

このように見てくると、病気というかたちで論じられている『摂食障害』や『性同一性障害』などから得られた知見と、普通とされる健常の人々を対象とした心理学的な諸調査研究によって提示された知見との間には共通した事実が存在することを指摘できるだろう。すなわち、ジェンダー認知と自己の性・性別に対する認知とは不可分といってよいほどに密接な関係にあり、近年のジェンダーに対する認知変容の基底には、自己の性・性別に対する懐疑的、否定的な認知が存在しているということである。ジェンダーに対する認知は自己の性・性別に対する認知よりも優位にあるか、少なくとも等価の関係にあるということである。

上述の議論を踏まえると、上述した近年の平等主義やジェンダー・フリーへの認知的変化における中核的な要因の１つに「自己の性についての懐疑的な認知」をおくことが妥当ではないかという仮説が成り立つ。少なくともジェンダーに対する認知的な変化には自己の性を無条件に受容しない懐疑的・反省的な認知が関係しているという見解は検証に値する仮説といえるのではないか。

Ⅳ．近年の心理尺度の開発・発展とその有効性について

（1）近年における心理尺度の開発と発展

Ⅱで指摘した心理学研究における目的を達成すべく、旧来のMMPIのMf尺度（1969）、GoughのCPIのFe尺度（1964）、あるいは南条の性度尺度（1978）など、いわゆる「性度尺度」と呼ばれた心理尺度に代わって、近年新たな原理に基づく尺度が種々開発され、研究者によって精力的な吟味が続けられている。現在、その代表的なものとして少なくとも、２つのタイプをあげることができる。１つは、Bem.S.L. に代表される『両性性尺度（BSRI : Bem Sex Role Inventory）』である。もう１つは「平等主義尺度 Egalitarian Scale」と総称されるものである。わが国では、前者については Bem のオリジナルの翻訳版がいくつか開発されている（下仲ら，1990；1991；Katsurada, E. & Sugihara, Y. , 1999；Sugihara, Y. & Katsurada, E. , 1999；2003ら）。後者については鈴木の一連の尺度がよく知られている（鈴木，1987；1991；1994）。これらの尺度はいずれもジェンダー認知や意識を把握することを目的として作成されていると見られるものである。これら２つの代表的な尺度は先述した心理学の研究目的であるジェンダー認知を捉えるのにふさわし

いものであろうか。あるいはいずれも不都合さを有しているのであろうか。両尺度それぞれの内容と特徴をまず説明し、両者の違いを明確にしてみる。

１）『両性性尺度（BSRI : Bem Sex Role Inventory）』

「両性性尺度（BSRI）」は、フェミニズムからの点検作業を精力的に行っていた Bem によって1970年代後半から80年代にかけて開発されたものである。Bemは、自己のジェンダーの発達理論を展開する中で、「両性(具有)性」という概念とともにBSRI（両性性尺度）を作成した（Bem, S.L. , 1974；1975；1981；1985)。「両性(具有)性」とは、従来男女に振り分けられてきた諸特性、つまり「男らしさを表す男性的特性」と「女らしさを表す女性的特性」とを、男女の別なく両方を併せもち、状況に応じてこれらを使いこなせることが望ましい発達であるとする概念である。この概念に基づいてBSRI（両性性尺度）という尺度が開発されたのである。具体的には、当時より流布していた男性的特性、女性的特性を表す性格特性それぞれ20項目を用意し、その両方について、調査対象者に７段階のどれかで自己評定してもらう形式の尺度である。評定結果は各個人について、男性的特性、女性的特性両方のそれぞれについて得点化し、男性得点、女性得点の差から、４つのタイプを導き出すようになっている。つまり、男性得点が女性得点よりも大きい者は「男性性保有者」、女性得点が男性得点よりも高い者は「女性性保有者」、男性得点と女性得点がともに高く、差がないものが「両性性保有者」、男性得点と女性得点がともに低く、差がないものが「両貧性保有者」と分類される。両性性保有者が最も望ましいパーソナリティ特性をもつものとして位置づけられている。（なお、４タイプの分類基準については、平均値を使用するｔ値法と中央値を採用する方法のどちらが有効かの議論の末、現在ではｔ値法を採用するものが比較的多い。）

この概念と尺度は研究者の関心を呼び、多くの追試研究が行われた。それらの諸研究から提示された知見は、少なくとも青年、成人世代では、「両性性」を有した人のほうが自尊感情や自己概念が高く、社会的・心理的適応が良好であるというものであった（湯川，1995など)。Bemの提唱以来、現在に至るまでこの「両性性」の概念の妥当性を巡って、種々の検証作業が持続的に行われている（Katsurada, E. & Sugihara, Y. , 1999；Sugihara, Y. & Katsurada, E. , 1999；2003)。

２）『平等主義尺度 The Scale of the Egalitarian Sex Role Attitude（SESRA)』

「平等主義尺度」は、ウーマン・リブやフェミニズムの思想に基づいて、フェミニズム意識の水準を測る目的で開発されたものである。フェミニズム意識とは、「男女は平等であると認識し、社会的に存在する個人としての女性の自己実現および社会的地位の向上をめざす意識」である。具体的には、鈴木の『平等主義的性役割態度尺度』では、結婚・男女観（男女の関係と役割分担に対する態度)、教育観（子供をもつこと・育児および子供の教育への態度)、職業観（女性の就労に対する態度)、社会観（社会における平等主義的な価値についての態度）の４つの領域カテゴリーから構成される計40の質問項目各々について５段階で自己評定するようになっている。わが国では鈴木のものが尺度としてのわかりやすさ、使用の便利さからよく利用されている（短縮版 SESRA-Sでは20項目）（鈴木，1978；1994a；1994b)。この尺度においては、得点の高いほう

がより平等主義的態度を有していると解釈される。

これら平等主義的な態度を測定する尺度は、その多くがジェンダー認知そのものの変化の測定をはじめ、ジェンダー認知の予測変数としての人口統計学的変数、サイコグラフィック変数、社会経済的変数およびその因果関係の発見、女性の就労、パーソナリティ特性、ストレスなど、多様な変数を説明する目的で登場してきたものである。

（2）「両性性尺度」、「平等主義的態度尺度」両尺度の有効性と限界：－量的データとしての把握から－

1）ジェンダー認知の変化をより的確に測るという目的からみて

心理学ではこれまでずっと心理的な特性や傾向を量的なデータとして提示し、そこから一般化できる知見を引き出すという方法がさまざまに検討され、「心理尺度」として浸透し、高い評価を得てきてもいる。とりわけ、「男らしさ・女らしさ」を測る「性度尺度」をはじめとして、性別役割観、ジェンダー規範やステレオタイプに対する意識などを測定するテクニックとしては、長くこうした心理尺度を用いた量的な指標が専ら使われてきた。先に紹介した「両性性尺度」「平等主義尺度」もこれらの中に入れられる。その意味ではこの２つの尺度は同じ部類に入る類似した尺度ではあるが、より詳細に検討すると、そこには微妙な違いを看取することができる。

「平等主義尺度」は鈴木の『平等主義的性役割態度尺度』に代表されるように、ジェンダーのあり方や規範に対する意識や態度を指標として、ジェンダー認知を把握する意図と狙いをもっている。調査対象者に、意識の状態や変化を直接に問うところにこの尺度の特質がある。何をたずねているのかが対象者に非常にわかりやすく、尺度のもつ意味は明快である。しかし、多くの利用を通じて一つの大きな弱点が露呈してきた。それは、意識や態度を直接にたずねられたときに、「建前」あるいは「社会的望ましさ」に基づく反応を多くの人々が頻出したことである（湯川, 準備中)。ジェンダーにかかわる問題、言い換えると、性的偏見や性差別を内包したジェンダー・システムに対して、女性の権利や人権等の地位向上をめざして異議申し立てをしたのがウーマン・リブやフェミニズムであったことを思い起こせば、建前で反応することが可能な質問項目で認知的変化を見ることは正確さを欠くばかりではなく、尺度として危険だとさえいえる。ジェンダー認知は本音と建前が使い分けられやすいという特質をもっていることを熟慮する必要がある。

一方、「両性性尺度」は、態度や意識を直接に問うのではなく、各個人が既に身につけている性格特性の中から、特にジェンダーにかかわる特性や行動傾向をピックアップして測定することからジェンダー認知を把握するものである。「男らしさ・女らしさ」を量的に測るという意味では、個々人の男らしさあるいは女らしさの程度を示す尺度であった従来の「性度尺度」の流れを汲むものではあるが、その原理は典型的な「性度尺度」とは全く異なっている。従来の「性度尺度」は、「男らしさ」と「女らしさ」は相対立する特性と捉えられており、一次元の尺度上に対極的に位置づけられていた（対極的一次元尺度)。男らしいことは女らしくないことであり、女らしいことは男らしくないことであるという考え方である。それに対して、「両性性尺度」は先に紹介したように、「男らしさ」と「女らしさ」を独立の次元と捉え、両方の特性を具有するこ

とが可能であるという原理を取っている（二次元尺度）。尺度構成そのものが、伝統的なジェンダー規範や通念を覆す原理に立っている。その意味では、ジェンダーについての認知を同じように測定する尺度でありながら、「平等主義的態度尺度」とはかなり異なった次元と内容を測っているといえる。

両者の尺度を比較検討すると、現時点では「両性性尺度」のほうが、反応された意識や態度に含まれるバイヤスや社会的望ましさをある程度軽減できているという点ではまだ安全かもしれない。

では、上記の指摘を踏まえた上で、ジェンダー認知の変化をより的確に測るという第１の目的から両尺度の有用性について考えてみる。Ⅱで概観したように、ジェンダーに対する認知の変化をみたこれまでの研究の多くは、ここ20年程度を目安として、世界の主要国の主に中流の大学生や若い成人を対象に、従来の性役割規範や特性語に対する認知を２時点で調べ、比較するという方法をとっていた。教育年数、結婚年数、職業キャリア、結婚や家族観、職業やキャリア観といった変化に関係すると予想される変数を入れて分析しているものは極めて僅かであった（McBroom, 1987）。

まず、変化を測る時間的スパンとしてどのような時点を設定するかについてであるが、多くの研究では、1960～70年代とそれからおよそ20年後の1980～90年代の２時点を目安としていた。これらは、世界規模での社会変動、特に人種差別や女性差別など様々な差別に対する人権擁護運動が勃興したのが1960年代であり、ここを起点として約四半世紀後を区切りの時期と見積もっていたといえる。このスパンは通常的には一世代差、研究上では２つのコホート差に当る。一世代差のみをみるというのはスパンとしては最小であろう。的確な変化の把握には理想的には２時点だけではなく３時点を設定することが望まれる。たとえばおよそ20年間隔で３時点、研究上の物理的な現実問題を鑑みても、少なくともおよそ10年間隔で３時点を含む計画が立案されるべきではないか。中間時点を設定することで、これを基準としてその前後の様相が比較できるとともに、３世代（コホート）をカバーできるからである。

次に、調査対象者の問題だが、人種、民族、年齢、社会階層、教育年齢、家族状況、職業状況等々、異なった条件をもつ人々全てを対象とすることが理想であるのはいうまでもない。現実に可能な限り広く対象者を求めるべきであろう。このとき、対象者の母語、つまり、質問項目に使われる言語とその翻訳の問題があるが、これについては文化比較研究で吟味されている様々な技法が参考になるだろう（鈴木，2004）。

続いて、使用する指標や測定具の問題についてだが、Ⅱの（１）で述べたように、従来のような同一測度や測定尺度を繰り返し使用することによって生じる限界を回避し、かつ文化的差異や言語の違いなどの問題を克服するためには、調査対象者の反応の自由度を最大限に確保できるような方法が求められる。その意味では限定された質問項目を利用している両尺度は、いずれも不十分さをもっているといわざるをえない。現時点で工夫しうるものとしては「自由連想法」や「自由記述法」形式の検査などが考えられよう。連想あるいは自由記述形式の調査では、対象者に強い教示上の制限を加えないことによって、対象者の反応レパートリや自由度を相当程度確保できるからである。この方法は時間的差異や調査対象者の属性上の様々な条件にもある程度は対

応できるのではないか（湯川，準備中）。

２）ジェンダー認知の変容を規定する要因・条件を明らかにするという目的からみて先に紹介した、ジェンダー認知を測定する代表的な２つのタイプの心理尺度である両性性尺度と平等主義的態度尺度のどちらが有効かを、Ⅲで論じた、ジェンダー認知の基底にあると考えられる「性の自己認知あるいは性の自己同一性」という概念との関係から考えてみる。

ちなみに、何かを測定しているとされる尺度が２つあった場合、心理学的には基準となる指標や変数を設定し、これと両者との相関を見るという方法がよくとられる。単に両者の相関のみを調べるだけでは、両者が何を測っているかが明確にならないからである。相関が高い場合は同じものを測定している可能性は推察できる。相関が低い場合は、両者が別の内容を測っていることは示せても、その中身までは明らかにできず、どちらが妥当かは判断できない。両者の違いを解釈し、説明することはできない。

本稿の論点であるジェンダー認知を測定する道具としてどちらの尺度が妥当かを吟味する上で基準とすべき指標として何をもってくるか。筆者は、ジェンダー認知の基底にあると考えられる「性の自己認知あるいは性の自己同一性」という概念をその指標として用いることを提案したい。「性の自己認知あるいは性の自己同一性」を基準となる指標として設定し、これと両者の関連を見るという提案である。その理由はⅢで述べたとおりである。旧来は無条件に受容し、また受容すべきとされていた自己の生物学的性について、これを当然視せず、疑問視し、自覚的に自問すること、つまり、自己の性についての懐疑的で反省的な認知こそが、ジェンダー規範や社会システムに対する懐疑や反問を促し、その否定へとつながると考えられるからである。

Ⅴ．終わりに

上記に論じてきたような検討を重ねれば、ジェンダー認知およびその変化を量的に把握するという目的にとって心理尺度はその有効性をかなりの程度発揮できるであろう。しかし、こうした量的尺度だけではやはり限界が来ると思われる。それは、 ジェンダー認知は、「平等主義尺度」や両性性尺度」で測られるような態度や意識あるいは性格特性のような、いわば静的な認知ではなく、個々人が生活し、遭遇している場面や状況、文脈に強く依存しているダイナミックな認知だからである。同じ人でも、置かれている状況や場面によって意見や考え方は違ってくるし、本人自身が明確に意識できていない場合も多々ある。ジェンダー認知の把握は一人ひとりの人間をいろいろな角度や視点からトータルにじっくり捉えることから始まる。それも、その人を客観的に見るだけでは不十分である。その人自身が語る生の声を聞く必要がある。その人自身の言葉によって語られ、表現されたものを大切にし、それを解釈し、説明する枠組を作り、丁寧に分析することが必要である。そして、それを裏打ちするための客観的な眼として心理尺度が強力なサポートとして役立ちうる。その意味で、心理尺度の有用性は十分にあると思われる。もちろん、その用い方や尺度構成、質問項目の特質などについての継続的な吟味が必要であることはいうまでもない。

ジェンダー認知およびその変化を把握する上で何よりも重要なことは、ジェンダーの問題とはその人の人生を、自分を賭けた、心の底から湧き出てくるものであるという認識を研究者がもつことであるということを強調しておきたい。われわれは、そうした人々の生の声に真摯に耳を傾けてはじめて、ジェンダーに対する認知のありようやその変化を的確に把握できるのではないだろうか。

文　献

1）浅野千恵　1996　女はなぜやせようとするのか　摂食障害とジェンダー　勁草書房

2）東清和・鈴木淳子　1991　性役割態度研究の展望　心理学研究, 62, 270 - 276.

3）Bem S.L., 1974 The measurement of psychological androgyny. Journal of Consulting and Clinical Psychology, 42, 155 - 162.

4）Bem S.L., 1975 Sex-role adaptability：One consequence of psychological androgyny. Journal of Personality and Social Psychology, 31, 634 - 643.

5）Bem S.L., 1981 Gender schema theory: A cognitive account of sex typing. Psychological Review, 88, 354 - 364.

6）Bem S.L., 1985 Androgyny and gender schema theory: A conceptual and empirical integration, In T.B. Sonderegger,（ed.）Nebraska symposium on motivation, Vol.32, University of Nebraska Press, 179 - 226.

7）井上輝子・江原由美子（編）　1991　女性のデータブック　有斐閣

8）井上輝子・江原由美子（編）　1999　女性のデータブック第３版　有斐閣

9）伊藤裕子　1978 性役割の評価に関する研究　教育心理学研究, 26, 1 - 11.

10）Katsurada, E . & Sugihara, Y., 1999 A preliminary validation of the Bem Sex Role Inventry in Japanese culture, Journal of Cross-cultural Psychology, 20, 48 - 59.

11）柏木恵子　1967　青年期における性役割の認知　教育心理学研究, 15, 193 - 202.

12）柏木恵子　1972　青年期における性役割の認知Ⅱ　教育心理学研究, 20, 48 - 58.

13）小柳茂子　1981 『自我同一性地位面接における女子の自我同一性の研究（その１）― 性同一性領域の追加と修正及び結果報告 ―』日本教育心理学会第23回総会, 454 - 455.

14）小柳茂子　1982 『自我同一性地位面接における女子青年の自我同一性の研究（その２）― 同一性達成とモラトリアムを中心とした状態像の検討 ―』日本教育心理学会第24回総会　144 - 145.

15）Lewin,M. & Tragos, L.M. , 1987 Has the feminist movement influenced adolescent sex role attitudes? A reassessment after a quarter century. Sex Roles, 16, 125 - 135.

16）牧野有可里　2002　高校生における食行動異常と痩せ願望 カウンセリング研究, 34(３), 300-310.

17）McBroom,W.H., 1987 Longitudinal change in sex role orientations: Differences between men and women. Sex Roles, 16, 439 - 452.

18）Money, J. & Tucker, P., 1975/1979 Sexual signatures: On being a man or woman. Little, Brown and Company. 朝山新一ほか訳　性の署名：問い直される男と女の意味　人文書院

19）小倉千加子　2001　セクシュアリテイの心理学　有斐閣

20）下仲順子・中里克治・河合千恵子　1990　老年期における性役割と心理的適応, 社会老年学, 31, 3 - 11.

21）下仲順子・中里克治・本間 昭　1991　長寿にかかわる人格特徴とその適応との関係 ― 東京在住100歳老人を中心として ― 発達心理学研究, 31, 136 - 147.

22）Sugihara, Y. & Katsurada, E., 1999 Masculinity and femininity in Japanese culture: A pilot Study, Sex

Roles, 40, 653 - 646.
23）Sugihara, Y. & Katsurada, E., 2003 Gender-role personality traits in Japanese culture, Psychology of Women Quarterly, 24, 309 - 318.
24）鈴木淳子　1987　フェミニズム・スケールの作成と信頼性・妥当性の検討, 社会心理学研究, 2, 45 - 54.
25）鈴木淳子　1994a　脱男性役割態度スケール（SARLM）の作成, 心理学研究, 64, 451 - 459.
26）鈴木淳子　1994b　平等主義的性役割態度スケール（短縮版）（SESRA-S）の作成, 心理学研究, 65, 34 - 41.
27）鈴木淳子　2004　ジェンダーに関する比較文化的研究の動向 ― 1990年以降の概念定義とメソドロジーを中心に ― 心理学研究, 75, 160 - 172.
28）Williams, J.E. & Best, D. L., 1982 Measuring sex stereotypes: A thirty-nation study. Beverly Hills, CA: Sage.
29）Williams, J.E. & Best, D. L., 1994 Cross-cultural views of women and men. In W. Lonner & R. Malpass (eds), Psychology and culture. Needham Heights, MA: Allyn & Bacon.
30）湯川隆子　1979　性差　日本児童研究所（編）児童心理学の進歩　1979版, 18, 金子書房, 237 - 265.
31）湯川隆子　1983　性役割　三宅和夫他（編）波多野－依田児童心理学ハンドブック, 金子書房, 251 - 263.
32）湯川隆子　1995　性差の研究　柏木恵子・高橋恵子（編著）発達心理学とフェミニズム, ミネルバ書房, 116 - 140.
33）湯川隆子　1995　態度・価値－女性の視点から　日本児童研究所（編）　児童心理学の進歩　1995版, 34, 金子書房, 166 - 193.
34）湯川隆子・廣岡秀一　2003　大学生におけるジェンダー特性語の認知（２）― 性分類反応からみた1970年代と1990年代の比較 ― 三重大学教育学部研究紀要（人文・社会科学）, 54, 117 - 123.
35）湯川隆子（準備中）高齢者におけるジェンダー認知の特徴について ― 両性性尺度と平等主義尺度の比較から ―

Summary

This brief report discussed two points for changes of gender cognition. The first point is how precisely we measure these changes of gender cognition in the recent Japanese culture. The second point is what concepts and measures we have to develop in order to grasp and clarify factors effecting the changes of gender cognition. Specifically, we placed the focus on two scales which were developed to measure gender cognition: the Bem Sex Role Inventory（BSRI）and the Scale of Egalitarian Sex Role Attitudes（SESRA）, and examine the validity and utility of the scales from the point of view of the relationship between social gender norms and human biological sex.